

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	龍 祐吉
2. 審査委員	主 査：（鳴門教育大学教授）浜崎隆司 副主査：（鳴門教育大学教授）田村隆宏 委 員：（鳴門教育大学教授）前田洋一 委 員：（岡山大学教授）西山 修 委 員：（鳴門教育大学教授）皆川直凡
3. 論文題目	学業的延引行動に関する実証的研究 —学業的延引行動の先行要因と否定的影響について—
4. 審査結果の要旨	<p>先端課題実践開発専攻先端課題実践開発連合講座 龍祐吉 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査 日時： 平成29年2月18日（土）14時00分～14時40分 場所： 鳴門教育大学 総合学生支援棟2階 学生セミナー室</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>第1章 学業的延引行動研究の動向と課題 第2章 学業的延引行動の先行要因に関する発達理論に基づくアプローチ 第3章 特性的要因と学業的延引行動との関係 第4章 養育態度と学業的延引行動との関係 第5章 学業的延引行動による否定的な影響 第6章 本研究の総括と今後の課題</p>

各章の概要は下記のとおりである。

第1章 学業的延引行動研究の動向と課題

第1節においては、学業的延引行動研究の背景と問題提起について言及した。第2節では、学業的延引行動に関する先行研究と関連領域に関する研究を概観し、第3節では、本研究の課題を4つの視座から検討することを言及した。さらに本研究の目的と意義、内容構成について言及した。

第2章 学業的延引行動の先行要因に関する発達理論に基づくアプローチ

発達理論に基づく先行要因に注目した。第1節では、愛着理論に係る愛着の内的作業モデルが、学業的延引行動の根源的要因であるという報告に基づいて、児童期の子どもを調査対象として、愛着の内的作業モデルと学業的延引行動との関係を検討した。その結果、自他共に肯定的表象を備えている安定型傾向が高いほど、授業に対する内発的動機づけが促されて、学業的延引行動が抑止される等を示した。第2節では、自我同一性地位理論に基づいて、4つの同一性地位と学業的延引行動との関係について検討した。その結果、自我の成熟とともに学業的延引行動が抑止されるといった、一義的な関係はないこと。そして自我同一性地位の主要な次元である「危機」と「投入」に中で「投入」の次元が学業的延引行動の抑止にとって比較的影響力が高いことを示した。

第3章 特性的要因と学業的延引行動との関係

本章では学業的延引行動に対する先行要因として、特性的要因との関係について検討した。第1節では、学業的達成目標との関係について検討した。その結果、習熟目標又は成績接近目標傾向が高まるほど、精緻化学習方略が促され学業的延引行動が抑止されることを示した。第2節では、自我状態の透過性調整力との関係について検討した。その結果、柔軟に気持ちを切り替える傾向が高まるほど学業的延引行動が抑止されることを示した。第3節ではエゴグラムの自我状態との関係について検討した。その結果、他者に寛容で思いやりがある傾向が高まるほど、又は他者に過度に協調する傾向が低くなるほど、学業的延引行動が抑止されることを示した。第4節においては、セルフ・コンパッションとの関係について検討した。その結果、マインドフルネス傾向が高まるほど、自己効力感や自律的動機づけを促すことを媒介として、学業的延引行動が抑止されることを示した。

第4章 養育態度と学業的延引行動との関係

学業的延引行動の先行要因として、認知された親の養育態度と学業的延引行動との関係について検討した。第1節においては、大学生(女子)を調査対象として、生活領域全般に関する認知された親の養育態度と学業的延引行動との関係について検討した。その結果、幼少期に子どもを大切に扱い、共に楽しく過ごそうとする親の働きかけは、自尊感情を促し、学業的延引行動を抑止することを示した。第2節では小学生、そして第3節においては大学生(女子)を対象として、学業的領域における認知された親の養育態度と学業的延引行動との関係について考察した。その結果、第2節においては、親が子どもの学習に対して努力することや広く教養を身につけることを期待するほど、子どもは学習内容を深く理解することの大切さを自覚して、学業的延引行動が抑止されることを示した。そして、第3節においては、親が子どもの学業成績の良し悪しとは関係なく、努力することの大切さを強調するほど、学業的延引行動が抑止されることを示した。

第5章 学業的延引行動による否定的な影響

本章では、学業的延引行動の否定的な影響に注目した。大学生を調査対象として、第1節では、学業的延引行動と学業的不正行為との関係を検討した。その結果、大学1,2年生において、学業的延引行動を習慣的に繰り返す傾向が高いほど、学業的不正を行いやすいことを示した。第2節では、学業的延引行動と自尊感情との関係について検討した。その結果、学業的延引行動を習慣的に繰り返す傾向が高いほど、自尊感情が低下しやすいことを示した。

第6章 本研究の総括と今後の課題

本章では、第1節において本研究の成果を要約した。第2節において本研究の成果について記述し、第3節において研究的並びに教育実践への意義、さらには第4節において今後の課題や展望について言及した。

2. 審査経過

独創性と発展性

学習者が習慣的に学業的延引行動を繰り返すことは、学習の機会を失い、学習の成績を低下させ、深刻な不適応状態に陥ることが報告されている。学業的延引行動は児童期から成人期にかけて日常的に幅広い年齢層で認められる行動であるが、本邦において研究テーマとして取り上げられることが少なく、特に児童期の子どもを扱った研究の知見の蓄積も乏しい。本研究では、発達理論、特性的要因、養育態度、否定的波及効果の4つの視座から多方面にわたって、学業的延引行動との関連を検討している点で独創的であるといえる。本研究の成果から学業的延引行動が情緒的、認知的、行動的自己調整の失敗に基づくこと、および学業的延引行動が問題行動に波及することが示唆された。その成果を踏まえて、さらに検討を進めていくことで、学業的延引行動に関する先行要因や関連要因との関係についてより精度の高い知見の蓄積が期待でき、学業的延引行動の克服に向けて有効な手法の開発につながると考えられる。

教育実践への貢献

学業的延引行動は、学業領域における問題行動である。本研究において、発達理論、特性的要因、養育態度と学業的延引行動との関係が明らかにされ、愛着理論、自我同一性地位理論に基づいた学習者へのアプローチ、学習方略の提言、望ましい養育態度の提言など学業的延引行動を防ぐための具体的な指導、支援のあり方について言及している。このような、本研究の成果は学校現場における具体的な指導、支援の在り方について提言可能な内容であり、学校現場の児童・生徒・学生の学業に対する問題行動の予防・介入を推進していく上で、大いに貢献する成果と認められる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、龍祐吉の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。